

食のリスクコミュニケーション意見交換会（東京）概要（未定稿*）

1. 日 時：平成16年2月16日（月）13：30～17：00
2. 場 所：ホテルフロラシオン青山（東京都港区）
3. 主 催：内閣府食品安全委員会、厚生労働省、農林水産省
共 催：独立行政法人農林水産消費技術センター
4. 参加者：182名（消費者、食品関連事業者、自治体関係者、報道等）

5. 議事

(1) 開会

(2) 大臣挨拶 小野清子 食品安全担当特命大臣

(3) 基調講演

「欧州・オランダにおける食の安全リスクコミュニケーション」

ヨハン・デ・レーウ オランダ食品消費者製品安全庁長官

同庁はリスクアセスメント活動を行う独立組織で、目に見える形でリスクの低減に貢献することが最大の任務。リスクコミュニケーションでは、情報の受け手の対応を考えて、科学的な実際のリスクと心の中のリスクのバランスをとることが大切だ。

「オランダにおけるフードチェーンの実態の報告」

ルル・ボル オランダ農業自然食品安全省産業貿易局長

オランダにおいても食品の多様化、新しい事業者の進出など、市場の競争が激化しつつある。このような状況の中で、消費者に信頼を得るためには、戦略的に情報をコントロールすることよりも、ますます透明性のあるフードチェーンを構築することが重要である。

(4) パネルディスカッション

コーディネーター：寺田委員長

小沢理恵子（日本生協連くらしと商品研究室長）：

オランダにおけるリスクアナリシスに対して、消費者が参加できる仕組みがあるのか。コミュニケーションの双方向性はどのようにしているのかについて、興味を持った。

山本宏樹（株式会社ニチレイ執行役員・品質保証部長）：

日頃、食品の「安全」と「安心」の理解が十分にされていないと感じている。多くの食品を輸入に頼っている状況のもと、リスクアナリシスの必要性を痛感している。

関澤純（徳島大学教授、食品安全委員会リスクコミュニケーション専門調査会座長）：

食品の安全性は国民全体にかかわる問題である。また多くの食品を輸入に頼っているという日本独自の事情も考慮しなければならない。現在の課題は、消費者や零細事業者の不安に応えられるネットワークや窓口の構築、リスクの考え方の普及が挙げられる。

*本資料は、各発言者など出席者による確認を経ていない未定稿であり、今後修正の可能性はある。

中村靖彦（明治大学客員教授、食品安全委員会委員）：

消費者が情報を受け取る窓口はメディアである。メディアはリスクコミュニケーションを通して、供給者と消費者の距離を縮めるといった役割をもっている。メディアはそのような意識をもって情報を供給すべきである。

金子清俊（国立精神・神経センター神経研究所疾病研究第7部長）：

リスクコミュニケーションでは、相互の信頼が一番大切である。まじめに取り組んでいくことが唯一の方法ではないかと思う。

デ・レーウ： リスクアナリシスへの消費者参加については、個別の消費者の意見を取り込むこともリスクコミュニケーションの一環であると考えている。

食品消費者製品安全庁（VWA）の組織として生産者、消費者代表が入ってはいないが、組織内に消費者に関する知識をもっている人はいる。消費者団体がステークホルダーダイアログに参加することはある。

フベルス： 消費者を無理やりコミュニケーションに参加させるわけにはいかない。アニュアルレポートの素案や年間計画に対する意見を消費者団体に求めることはある。信頼性については、透明性の確保と実行が重要である。

外口崇（厚生労働省大臣官房参事官）：

VWA ができてから、農業省、厚生労働省の機能はどのように変わったのか。

デ・レーウ： 我々の業務のお金は厚生労働省が出している。食肉の検査は農業省が担当している。我々はこれらの組織からは独立した機関である。どこの所管かということよりも、社会や消費者の信頼を得ることが重要であると考えている。

関澤： 日本では食糧生産の多くを諸外国に頼っている。オランダでは農業保護にどのようなコンセンサスをどうとっているのか。また、遺伝子組換えのコンセンサスはどのようにとっているのか。

デ・レーウ： 遺伝子組換えについては欧州共通の政策がとられている。欧州においては、食の安全という側面よりも、遺伝の可能性喪失など、環境に対する危惧がある。

フベルス： 農業保護政策については、経済、食品安全、基準を満たしながらどのようにしていくかに留意している。

（5）会場との意見交換

会場： オランダでの残留農薬に対する消費者の意識はどうか

A（オランダ）： オランダも残留農薬を心配する消費者は多い。長期的なビジョンとして、消費者教育を考えたい。リスクコミュニケーションで、一般大衆の意識を変えて行きたい。

会場： オランダが食品を海外に輸出する場合、他国の基準に合わせることはあるのか。

A（オランダ）： どんな場合も、オランダ国内で作るものは、すべて国内基準に合わせる。国内基準は、少なくとも、EU基準という高い基準を満たしている。

会場： 地産池消を、子供の時から教育に取り込むべきではないか、食品安全委員会で、消費者研究や文化などの幅広い要素を取り込むべきではないか

A（寺田）： その通りであり、人文科学の科学者に、リスクコミュニケーションに関してもっと調べてもらわないといけないと感じている。

A (姫田): 現在、自民党で食育基本法案が検討されており、パブリック・コメントをいただいているところ。

会場：BSEについて、オランダで行われたリスクコミュニケーション 米国で発生したBSEに対する日本の今後の対応を聞きたい。

A (オランダ): 非常に迅速に、飼料や検査についての方針を決めて対応し、社会や議会に直接説明したため、国民からの政府への信頼は高まった。

A (姫田): 特定危険部位の除去で安全を、全頭検査で安心を確保したと考えている。米国にも同等の対応をしていただくのが、政府への信頼を保つことになるのではないかと思います。

会場：ペットボトルからペットボトルへのリサイクルの安全性審査はいつ終わるのか

A (寺田): 専門調査会が立ち上がったところで、普通は4～5回で一つ決めていくが、半年くらいではないか

会場：オランダでは、HACCPを国で認定しているのか、日本ではHACCP認定が最近あまり進んでいないようだが、今後の見通しはどうか。

A (オランダ): オランダのHACCPシステムは、認証はしない。大企業向けと中小企業向けの二つあり、大企業のほとんどにはHACCPシステムがあり、なければ作るよう指導する。中小企業の場合は自分で作るのが大変なので、業界が行動規範を作る。

A (外口): HACCPは、自主管理を促すシステムであることが大切。法改正で、三年ごとの更新を導入し、食品衛生監視員の存在も義務付けた。定着は、業界の支持次第だろう。

会場：いらぬ添加物も安全性審査をしていると思う。食品安全について、消費者からも安全性審査を求められるようにすべきだ

A (オランダ): オランダでも同じ議論がある。オランダでは、持続可能な農業でなければならないという考えで、農薬などの使用が減っている。たとえ安全と言われても、使用しないようにする時代になってきたのではないか。

A (寺田): 消費者が自らデータをそろえて申請するのは難しいだろう。これはどうなっているのかと問い合わせただけだが、いいのではないかと思います。

会場：ドイツや英国でのBSEパニックが身近なものとしてあったはずだが、なぜオランダではパニックが起らなかったのか

A (オランダ): 英国もドイツも隣国だが、国による文化の違いがある。またオランダでは「毎年30頭くらい発生するのではないか」とはっきりリスクコミュニケーションしてきた。ドイツは、「発生は全くない」と言って発生したので、信頼が落ちたのかもしれない。

会場：オランダは、EU全体の調整役なのかと思う。食品についての共同体が、アジアでできるのではないか。そういった可能性をどう考えるか

A (オランダ): 政治状況がわからないので答えは難しいが、実現すれば素晴らしい。オランダにできることがあれば、いつでもコンタクトしてほしい。また、ヨーロッパのスーパー

間の組織で、米国も参加するスーパーのユーロケープなどに参加するのも可能だ。

(6) 閉会挨拶

小泉直子 食品安全委員会委員

(参考)

「食のリスクコミュニケーション意見交換会(東京)」

アンケートの集計結果

参加者数：182 回答数：129(回答率70.9%)

問1 ご自身について、ご回答ください。

1) 消費者	17	13.2%
2) 食品関連事業者	53	41.1%
3) 食品関連団体	15	11.6%
4) 研究機関	4	3.1%
5) 行政関係	23	17.8%
6) マスコミ関係	3	2.3%
7) その他	14	10.9%

農業メーカー(4)、サービス業、原子力関係団体、公益法人職員など

問2 本日の意見交換会は、何かからお知りになりましたか。

1) 食品安全委員会のホームページ	38	29.0%
2) 食品安全委員会からのご案内資料	31	23.7%
3) ポスターを見て	0	0.0%
4) チラシを見て	0	0.0%
5) 関係団体からのご案内資料	48	36.6%
6) 知人からの紹介	2	1.5%
7) その他	12	9.2%

日本農業新聞記事(4)、オランダ大使館から紹介(3)、農水省・厚労省のプレスリリース(2)、行政からの案内など

問3 基調講演についてお伺いします。講演内容について、十分理解することができましたか。

1) 理解できた	25	19.4%
2) だいたい理解できた	75	58.1%
3) あまり理解できなかった	28	21.7%
4) できなかった	1	0.8%

附問3-1 (問3で「理解できた」「だいたい理解できた」と回答した方)

内容がわかりやすかった点はどこですか。当てはまるものはすべてご回答ください。

1) 説明が明瞭で的確だった	49
2) 資料内容が平易でわかりやすかった	36
3) 適切な説明時間が確保されていた	18
4) その他	7

附問3-2 (問3で「あまり理解できなかった」「できなかった」と回答した方)

内容がわかりにくかった点はどこですか。当てはまるものはすべてご回答ください。

1) 説明に専門用語が多い	5
---------------	---

2) 資料がわかりにくい	16
3) 聞き取りにくい	13
4) 適切な説明時間が確保されていなかった	7
5) その他	8
<ul style="list-style-type: none"> ・日本語訳がわかりにくい(3) ・手元資料と講演が一致していない(2) ・情報がまとめきれていない など 	

問4 パネルディスカッションについてお伺いします。内容について十分に理解することができましたか。

1) 理解できた	31	24.0%
2) だいたい理解できた	61	47.3%
3) あまり理解できなかった	25	19.4%
4) できなかった	1	0.8%
無回答	11	8.5%

附問4-1 (問4で「理解できた」「だいたい理解できた」と回答した方)

内容がわかりやすかった点はどこですか。当てはまるものはすべてご回答ください。

1) パネリストの異なる立場での意見を聞くことができた	53
2) 説明が明瞭で的確だった	37
3) 適切な説明時間が確保されていた	15
4) その他	9

附問4-2 (問4で「あまり理解できなかった」「できなかった」と回答した方)

内容がわかりにくかった点はどこですか。当てはまるものはすべてご回答ください。

1) 説明に専門用語が多い	0
2) 聞き取りにくい	4
3) 適切な説明時間が確保されていなかった	15
4) その他	10
<ul style="list-style-type: none"> ・議論がかみあっていない(5) ・パネルディスカッションの形になっていないようだ(3) ・論点を絞って欲しい(2) ・パネリスト間のお話がかみ合わない(2) ・時間が少ない(2) ・質問者の質問が整理されていない ・日本のリスクコミュニケーションの現状をパネルディスカッションして、オランダとの対比ができると良かった ・オランダの状況を聴くだけの場になってしまった など 	

問5 本日の意見交換会全体についてお伺いします。満足度とその理由をお答えください。

1) 満足	13	10.1%
2) だいたい満足	74	57.4%
3) やや不満	27	20.9%
4) 不満	3	2.3%
無回答	12	9.3%

- 理由
- ・オランダ、EUの現状や最先端の生の声がよく理解できた(16)
 - ・リスコミについての理解が深まった(5)
 - ・会場とのやりとりが活発だった、質問に答えようとする姿勢が良い(5)
 - ・時間が十分確保されていた(2)
 - ・フベルス氏の残留農薬に関する消費者教育の話が良かった
 - ・コーディネーターのコントロールが良かった
 - ・会の開催自体、良いことである
 - ・正直に自分の意見を言っている
 - ・時間が足りない(4)
 - ・リスコミについてもっと深くディスカッションしてほしい(不十分)(4)
 - ・パネリストの数が多いい(2~3人がいいのではないか)(3)
 - ・具体的でない、テーマが絞れていない(2)
 - ・質問者がよく質問をまとめていない(2)
 - ・質問会になってしまっている
 - ・事前質問に答えて欲しい
- など

問6 今回の意見交換会についてご意見、ご感想などございましたら、ご記入ください。また、リスクコミュニケーションに関するご質問・ご意見などございましたら、あわせてご記入ください。

- ・とても有意義な交換会でした。
- ・日本でどうするのか、本音を聞きたかった。
- ・参加者には、関係者が多いのではないか。家庭の主婦(夫)や仕事をリタイアした世代も比較的時間があると思うので、そういう人達も関心をもって参加してもらえるような工夫を考えてもいいと思う。
- ・今後具体的な方法及び例を消費者や生産者等に説明することでリスクコミュニケーションが有効になる。
- ・率直な質疑応答が多かったように思う(但、厚労省、農水省は型通りの感じ)。
- ・会場との意見交換はわかりやすくてよかった。
- ・まずは、メディアの功罪。素人がゴシップにする上で、争点、状況が消費者にわからない。もう一つは、日本人の資質。人から与えてもらうことに慣れすぎていて平和ボケしている。リスクコミュニケーションについても、情報の確実性を個々が認識すべき。「信頼」という言葉があったが、これはお互いに双方の確実性の認識をするための言葉で、食の安心のための第一歩。これがないからメディアも被害者意識にたったお祭り報道になる。消費者の教育も必要(目を育てる)。
- ・オランダでは、コミュニケーションが成功している具体例を資料として準備して欲しかった。EUでは、農業従事者や輸送業者のデモがよくおきているが、コミュニケーションは本当に上手くいっているのか。傍聴者の方がよっぽどいい質問をしている。
- ・消費者はメディアによるニュースが次々と取り上げられ、何が安全で安心なのかが、大変わかりにくくなってきている。色々な食品上のリスクが報道される中、このあたりは大丈夫、という目安が欲しい(日々変化するので、その都度必要と思います)。
- ・今後も継続を希望します。コメンテーターの山本さんが言われた「安全・安心」について、いかに考えていくべきか、我々が考えて決めていくことが必要と思います。
- ・今後も時宜を見て会を開催して、情報提供をお願いします。
- ・メディア、消費者の教育が必要である。
- ・もう少し、現場の声(パネリストでいうとニチレイの山本さんなど)が多く欲しかった。
- ・食育の方法についてもっと知りたい。
- ・日本も自給自足できるように取り組むべき。
- ・パネルディスカッションを行なうのであれば、もう少し具体的テーマを設けた方がよい。
- ・パネルディスカッションに工夫が欲しい。

・大変参考になった。平坦な言葉で分かりやすかった。

・リスクに対して、消費者が情報を得るためにメディアやインターネット等、いろいろな手段があると思うが、食品製造事業者の立場から見て、消費者が安心と思えるような情報提供の手段、内容はどのような形、内容が最も良いと思われますか？

・消費者代表として、いつも生協連の役員が出ているが、本当に消費者の代表なのか？もっといろいろな消費者を参加させて欲しい。また、生産者、例えば農家(酪農家、米/野菜/果物農家)の声も反映させて欲しい。加工食品会社の声ばかりが生産者の声ではないのでは。

・文化、環境の異なる国の考えの中にも、日本、日本の地域に取り入れるべき考え方を聞けるので、今後もこのような意見交換会を開催して欲しい。

・日本における現状の問題点、課題に関し、組織としての先達であるオランダでの対応及び考え方を整理してコメントをもらえるように進めてもらいたかった。

・安全はただでない。企業への提言は良いが、コストに跳ね返る中小企業は資金の面で手当てすべきである。

・実質的に食に関わる人達に対する、情報提供の仕方を具体的に考えた方が良いと思います。用意に全ての人々に直に判る方法で...。多様な情報があふれている中で、食の安全の情報を確実に伝える必要があるため。

・これからも、このような機会が欲しい。

・パネリストは2~3人に絞り、質疑(質問者のボケた人は排除すべき)を密にし、論点を明確にした方がよかった。

・会場からの質問のレベルを上げて欲しい。また、そういう低レベルの人とのコミュニケーションをどうすればよいのか。

・食の安全対策が社会生活全体に渡る問題を抱えており、情報化社会の中にあって正確な情報を共有していくことが今後、より必要なことと考える。

・出席者とのコミュニケーションから行政や社会の動きが見えてくる。この時間帯を多くする方が良い。

・通訳レベルの向上。(資料)のレベルの向上。どちらも分かりにくい。

・生産者サイドの声も聞けたらよかったと思う。

・国内で取り組まれているリスクの事例発表(団体、行政等)などを教えて欲しい。リスクコミュニケーション意見交換会と主旨が異なっていた。(オランダの状況を聴く場となっていた。)

・食品分野外だが、リスクコミュニケーションの難しさ、しかし大切さが真に認識できてきた。

・オランダの状況が良く分かった。このように海外の事情などを地道に行なっていくことが、リスクコミュニケーションとして大切と思います。

・リスクコミュニケーションは、双方の信頼と双方の知的レベルがあってから、まともに行なわれるはず。従って、このような意見交換会は、ターゲット別に行なった方が効果的と思います。予算がなくてもボランティアベースでもっともっと多く開いて欲しい。

・一般消費者への理解の差があるということであったが、レベルの問題をどう考えるのかも検討して欲しい。

・各方面の専門家の方々のお話を聴くことができ大変勉強になりました。日本はコミュニケーションがあまり上手くないのかもしれないですね。頭で分かるのではなく、言葉で説明していく必要性を感じます。双方向で。

・オランダ事情が良くわかりました。良かった。

・このような場を継続させ、定期的に行うことが必要である。

・オランダのように独立性があって、執行できるのがいいですね。

・もう少し時間的余裕があればよい。全体が長時間になっても、休憩を1回から2回に増やすことも良いと思う。このような意見交換会はいつもいつもできるものではないため。

・今回のリスクの内容をHP等で公表して欲しい。

- ・意見交換が大変活発であった。
- ・食品安全委員会の皆様をお願いしたい。会場からの質問で、「消費者として～」と発言した人は、あの程度のレベルなので、是非リスクコミで啓蒙して欲しい。
- ・日本と比較でき、とても興味深く聴くことができました。また、機会があったら参加したい。
- ・消費者と消費者団体は違うものとして扱う。マスメディアを入れて欲しい。
- ・リスクコミュニケーションには、有識者だけでなく一般生活者から1～2名パネルディスカッションに参加して頂くと実感が出てくると思います。パネラーの員数をもっと絞っていただきたいと思います。
- ・今回の出席者（一般）は知的レベルが比較的高い人々が多いと感じた。もっとレベルの低い予備知識を持たないような人々と意見交換し、食の安全について正しい知識を持たせてあげてください。
- ・パネリストの人数が多かったので意見が聞けなかった。
- ・食の問題はめまぐるしく変わるだけに、定期的に（できれば3ヶ月に1度）こうしたコミュニケーションの場がもてると良い。
- ・リスクコミにおけるマスメディアの役割が大きいことを委員の方が意識していらっしゃることに大いに共感する。しかし、マスメディアのリスクコミへの参画が不明であり、道筋を示して欲しい。
(単に報道だけではなく)

問7 今後、食品安全委員会におけるリスクコミュニケーションとして行ってほしい取組みは何だと思われませんか。当てはまるものを全てお答えください。

- | | |
|--------------------------------|-----|
| 1) 今回のような意見交換会の積極的な開催 | 6 1 |
| 2) 食品の安全に関する平易で基礎的な勉強会の開催 | 5 4 |
| 3) 参加者全てが発言できるような、少人数の座談会の開催 | 1 8 |
| 4) 各層有識者を交えた、シンポジウムの開催 | 4 1 |
| 5) 消費者、生産者、事業者が意見をいつでも言える窓口の設置 | 5 4 |
| 6) 地方における意見交換会の開催 | 2 1 |
| 7) その他 | 9 |
- ・ 個々の消費者の意見を聴く会（3）
 - ・ マスメディアとのタイアップ（2）
 - ・ 様々な意見に答える回答の公表
 - ・ テーマを絞ったリスクコミュニケーション
 - ・ 食品安全委員会が今後どのように活動していくのか、委員意見を聞きたい など

問8 今後の意見交換会で取り上げてほしいテーマは何ですか。当てはまるものを3つまで下記の解答欄に番号でお答えください。

- | | |
|------------------------------|-----|
| 1) 残留農薬に関するテーマ | 4 4 |
| 2) 食品添加物に関するテーマ | 3 5 |
| 3) 遺伝子組換えに関するテーマ | 2 6 |
| 4) 食品中に混入する汚染物質に関するテーマ | 2 9 |
| 5) 動物用抗菌性物質（いわゆる抗生物質）に関するテーマ | 1 7 |
| 6) 有害微生物に関するテーマ | 3 0 |
| 7) 輸入食品に関するテーマ | 4 8 |
| 8) 食品表示に関するテーマ | 4 2 |
| 9) リスクコミュニケーションに関するテーマ | 3 4 |

附問8 - 1 取り上げてほしいテーマとして選択された理由（食品を選ぶ際の判断基準にしたい、

専門家の意見を聞いて理解を深めたい、現在の活動に生かしたい)を次の中からお答えください。

1) 残留農薬	5	14	22
2) 食品添加物	6	10	17
3) 遺伝子組換え	1	12	12
4) 食品中の汚染物質	3	16	10
5) 動物用抗菌性物質	2	10	6
6) 有害微生物	3	14	12
7) 輸入食品	7	18	24
8) 食品表示	10	5	24
9) 農薬・食品添加物・遺伝子組換え	2	15	17

問9 このような意見交換会にご参加していただきやすい開催日時は、いずれですか。

- | | |
|---------------------|----|
| 1) 平日の午前 | 4 |
| 2) 平日の午後(1~5時頃) | 92 |
| 3) 平日の午後6時以降 | 2 |
| 4) 土曜日の午前 | 1 |
| 5) 土曜日の午後(1~5時頃) | 16 |
| 6) 土曜日の午後6時以降 | 1 |
| 7) 日曜日・祝日の午前 | 0 |
| 8) 日曜日・祝日の午後(1~5時頃) | 4 |
| 9) 日曜日・祝日の午後6時以降 | 0 |

問10 ご自身の食生活において、気をつけられていることがございましたら、できるだけ具体的にご記入ください。

・食品表示の確認。よりリスクの少ないと考える方を選ぶ(添加物など)。精肉の加熱。

・食品表示内容の確認。

・国産の農水産物を優先的に食することにしている。

・脂質の摂取量。

・多種類の食品を摂る。

・表示を信用しない。

・表示内容を良く見て購入する。

・鮮度。衛生的な取り扱い。合成着色料の入っているものは食べない。

・加工食品は食べないようにしている(特にインスタント食品)。

・生鮮食品に熱を加えて食するようにしている(生肉は食べない)。

・賞味期限に注意して買物をしている。

・台所の衛生に気をつける。

・加熱を十分に行なう。

・乳幼児の食生活はどうあるべきかについては、関心がある。特に、食物アレルギーが増加しているとのことで。

・余計に食べ過ぎない。決められた表示がされている食品を選ぶ。農作物はなるべくなら

生産者名まで表示されているもの(近いところの生産物を食べる)。間食は控える。

・肥満。中性脂肪。

・特に無し(野菜なら、色、臭い等を見るが)。

・賞味期限、原産地国を確認し、期限の残存日の大きいもの、また国産のものを購入する。

先般、GMOの掛け合わせ品種の安全が決定されたが、GMO技術の開発国でない日本で世界に先駆けて承認する必要性が今ひとつ理解できない。GMOの組み込まれた遺伝子が自然界に流出するリスクを何故評価しないのですか。

・鮮度のよいものを買う。

・加工食品に限らず、遺伝子組換えのものが使用されているか、原産国はどこか、食品添加物は何を使ってあるか等々、表示は(産地)必ず確認。野菜などで産地の不明なものは、売場担当者に尋ねる等々して、買物には十分に留意しています。が、安心して購入できる状況ではないと時に思っています。栄養士仲間で食育、集団給食施設でのリスクコミュニケーションの話し合いも進めていますが...。学校給食では地場産の野菜を使用。残渣は堆肥にして農家に使用して頂いています。

・エネルギー過多にならないようにしている。

・女房に任せており、特に無し。したがって、購入者に分かり易い仕組みが大切だと思います。

・加工食品は極力抑えて、自分で調理をした食品を摂取するように努力している。

・表示も信頼できないため、特に気にしないようにしている。もう少し上級レベルのトレーサビリティシステムの構築を期待しています。

・産地、表示の確認。

・なるべく、国産品を購入している(高くても構わない)。輸入品の安全性に疑問を感じているからです。

・妻にお任せというのが現状です。自分としては、殆ど何もしておりません。

・有機食品と野菜(地元)を選んでいる。

・全て購入の際には価格を重視し、その他産地、賞味期限をチェックして選んでいます。

・四半世紀に渡り、消費者活動を行なってきたが、30年も前から今あることを予測し、学習し、提起してきたにもかかわらず、御用科学者の責任は重大だと考えています。

・肉をあまり食べないで魚、野菜中心のごはん食を習慣としている。甘い加工食品を少なく、果物を多く食べるようにしている。加工食品は殆ど食べないようにしている。また、食品の賞味期限や添加物には気をつけている。

・カロリー表示(血糖値が高い)。外食では、バランスの良い低カロリー食が少なく、カロリー表示も少ない。外食も食品安全委員会として取り組む必要があると考える。

・賞味期限の確認。容器包装のリサイクル(分別)の遵守。金属を含むプラスチック製品(キャップなど)に「フ」のリサイクルマークを表示するのは、法目的からおかしいのではないか。

(食品の安全とは直接の関係はありませんが。)

・特に無し

・直売所などアグリビジネスと地産地消活動、食育などに食品安全を生かすようにしたい。

・通常の注意を行なうのみ。表示などは職業柄調べる意味がない。

・法定表示がまともなもの。

・食料品などは、同じ店から、または常に食している食料品を入手するように心掛けている。

・偏らない。(バランスをとって、多種の食材)

食べ過ぎない。

において、味、色などについての感覚を動員して食中毒を防ぐ努力。

・できるだけ生ものは食べない。加工食品ではなく、家庭で料理したものを食べる。食品添加物を使用していない食品を選ぶ。輸入品はできうる限り避ける。遺伝子組換え食品は買わないように心掛ける。

・保存料や着色料などを使用していないものをできるだけ選ぶようにしている。国内産のものを購入

することが多い。

・食品の表示を確認して選ぶ。(原材料名、産地、製造日、消費期限) バランスの取れた食生活。特に無し。

・やはり、最低限、消費者として表示を確認し、記載方法をよく読んで、食べるように心掛けている。

・添加物の少ないもの。国産のもの。包材の表示は必ず確認する。栄養バランスのとれた食事。

・消費者にできることは表示を見ることしかない。表示にウソがあることが一番困るし恐ろしい。

・同一のものを食べ続けるのではなく、いろいろなものを食べる。

(朝食はパン、夕食は米 牛乳、ヨーグルトのメーカーを時々変更)

・毎日、体重を測定し食べる量と運動量をコントロールする。

・オランダないしEUとしては、高コストで真の食品安全・安心システムを作ろうとしているようだが、必要なときは時機を失しないように資金も投入するべき。ケチると後で、さらに膨大な資金投入のような対応策が必要となるのでは。

・栄養バランス。野菜、果物の確保 最近の甘い果物のビタミン類の含量は心配です。動物脂質を取り過ぎない。魚/肉のバランス。

・バランス取れた食生活。なんでも好き嫌いなく食べる。時には、グルメも楽しむ。

・多くの品目を摂るように心掛けている。

・賞味期限を確認している。Fat の摂りすぎに注意している。マスコミの報道が適正か、確認しながら店頭や表示を見ている。

・バランスに尽きる。偏らない。

・まず第一に、おいしく食べること。次に、いろいろなものを食べること。細かいことを気にするあまり、自分の健康全体を考えた中での“食”とらえを捉えるべきであると考えている。

・期限表示確認する。添加物表示確認する。

・まず、表示を見ます(加工食品でなくても)。国産のものを選ぶ。

・偏りのない、バランスのとれた食事。

・食肉、鮮魚・日付(消費日付)と本体の品質に間違った表示がないかどうかを視認する。

(自分の目で確認)加工食品 特に安売り品。発展途上国産の品物なのかを裏貼り、外観チェックで判断する。

・食品は「遺伝子組換え」でないものを選ぶ。残留農薬に関しては、特に気に留めることではないのではと考えているので、有機栽培にはこだわらない。

・生鮮食品は鮮度の良い店で買うようにしている。加工食品の賞味期限は必ず確認している。

・食品を取り扱う祭の手洗い、うがい等。食品の保存方法と温度など。

加工食品では表示の原材料に糖アルコール等が使用していないものを選ぶ。(体質が合わない)

・栄養バランスを考え、ビタミン、ミネラルを積極的に摂取。

加工食品は、表示を確認し、内容を知った上で食べる。

加熱、清潔、迅速で食中毒を防ぐ。

塩分、糖分に注意する。

・野菜中心にした料理を食べる。なるべく手作りして、しっかり食べる。規則正しく食事を取る。

・コレステロールを多く含む食品は、あまり食べない(好きですが)。ラーメンの汁は飲まないなど。

塩分はあまり摂らないようにする。

・購入時の原産国の確認。なるべく生物を食べない。

・偏食を避ける。

・パッケージされている加工食品は、表示を含めて明確になっていると思う。しかし、店頭及び飲食店では、その整合性が取れていないのが実態である。今後、その対応が必要であると、普段食生活において感じる場所である。

・量販店でもCVSでも各食品の表示、記載事項をよく読む。(店頭で)店主、販売員の言うことは、あまり信用できないので自分で判断する。(家内も同様)価格は安いに越したことはないが、少々高くても安心して食べられるものを買う。食生活については少量多品種を毎日食べるように気をつけている。

・自給率の低くなった日本の国で自国の生産物をできるだけ買い求めて食べることが大切であることを自己の信念としている。

・肥満、血圧上昇に影響がありそうな食品に留意しつつ選択。食品製造、販売に関係しているものとして、購入しようと思う食品の表示内容(特に原産国、原材料名)

・できるだけ国産品を選択し、生産情報が分かるものを購入するようにしている。日本食をするよう心構えている。

・できるだけ、地産地消を頭に入れ、地域産の食品を購入している。

・栄養を考えた摂取。